

文学としてのマンガ

— 現代版竹取物語・「セーラームーン」について —

山田 利博

Considering Comics as Literature : A Modern Version of Taketori-Monogatari
"SAILOR MOON"

Toshihiro YAMADA

周知のように、大学紀要が余り読まれなくなって久しいが、勿論これで良いはずがない。本学では特に、学部学生も読むものを目指したいという、刊行委員会元及び前委員長の依頼を受け、普段から趣味でその方面の研究をしている稿者が、そのネタで稿を草することになった、などという言い訳は、本来不要であるかもしれない。と言うのは、現在日本で発行されている書籍・雑誌の、実に4割はマンガなのであり、この分野を無視することなど最早不可能であるからだ。

尤も、これまでにその研究が全くなされなかったわけではない。心理学、社会学の方面では比較的早く注目されてきたし、作品そのものの分析としては、漱石の孫で、自身も漫画家である夏目房之介氏の手になる一連の論考が特に秀逸である⁽¹⁾。文字と絵画の複合作品たるマンガは、氏のような分析方法が最も適当であるのかもしれないが、残念ながら稿者には絵心が無く、その方面で発言することなどとても出来ない。そこで稿者は、己の専門たる平安文学的視点を以て、分析しようとする次第である。

そんなことを言うと、平安文学とマンガに何の共通点があるかと思われる向きもあるかもしれないが、既に三谷邦明氏も何度か言及されている⁽²⁾ように、物語など、当時は女子供しか読まなかったものであり、男が読むと恥ずかしいとされ、今で言う少女マンガの位置に極めて近い。言ってしまうと文学など所詮その程度のものなのであり、ならばマンガを同列に論じて何処が悪いということにもなりかねないが、もう少し丁寧な言い方をすれば、万人を惹きつける作品というのは、それが何かは分からないけれども、人間が普遍的に有する好尚に適っているからであり、その正体に少しでも迫ってみたいというのが、稿者が古典文学を志した理由であるから、そういう意味でもこの二者に、さほどの径庭は無いのである。

そこでこれから、機会があればそうした視点で、幾つかのマンガ作品を分析したいと思うのであるが、今回はその初めということで、「美少女戦士セーラームーン」を取り上げよう。と言うのは、この作品は、本稿が徐々に明らかにしていくように、比較的分かりやすい形で文学的要素が散りばめられているし、何よりかなりヒットした⁽³⁾ので、ほとんどの方が名前ぐらいは御存知だろうと思うからである。ただ、次節で詳しく述べるように、終了して早一年以上

が経過しているから、時期的には遅きに失したという感否めないが、流行性のあるものを取り上げる場合は致し方ないと思われる。諒とせられたい。

1 作品の概略

詳しい分析に入る前に、作品の概略を述べておこう。

原作者は武内直子という女性で、1992年正月から、97年の2月まで、雑誌『なかよし』に連載された⁽⁴⁾。91年、同じく講談社発行の雑誌『るんるん』8月号に読み切り掲載された、やはり武内直子の作品「コードネームはセーラーV」が好評であったため、その拡大版という形⁽⁵⁾で開始されたこの作品は、最初からテレビアニメ化することが前提で、そちらの方は1992年2月から97年2月まで、テレビ朝日系で放映された⁽⁶⁾。なおこの作品にはこの他に、劇場用アニメ4作⁽⁷⁾と、その方面は余り詳しくないので断定は出来ないけれども、ミュージカルが少なくとも3つ存在する。

内容は、遙かなる古代、地球人類とは異なる生命体が作り上げた月の王国シルバー・ミレニアムのプリンセス・セレニティは、地球国（そのころ地球は一つの国家であったことになっている）のプリンス・エンディミオンと密かに惹かれ合っていた。だが、同じくエンディミオンを蔭ながら慕う地球の女性クィン・ベリルが、人間の憎悪の固まりであるクィン・メタリアに取り憑かれ、悪の組織ダーク・キングダムの一員となって月の王国に攻め入ったため、プリンセスの母であるクィーン・セレニティが、命を懸けてクィン・メタリアを封印したものの、シルバー・ミレニアムは滅び、プリンセスとエンディミオンも非業の死を遂げる。その二人が現代の地球に転生したのが、この作品の主人公セーラームーンこと月野うさぎと、後にその恋人となるタキシード仮面こと地場衛（ちばまもる）である。前世の記憶を失くした月野うさぎは、東京の麻布にある十番中学の2年生として平穏な日々を送っていたが、クィン・メタリアが封印を解いて復活しようとしていることを察知した、セレニティの側近であった黒猫のルナ⁽⁸⁾の手により、セーラームーンとして覚醒し、宿敵ダーク・キングダムを倒した（ここまでが、テレビアニメ「美少女戦士セーラームーン」の内容）後も、地球と太陽系を守るため、悪の組織と戦い続けるというもののである。

このように、作品の概要を聞いただけで、この作品が竹取物語とかなり類似していることを御理解頂けたらどうか。悪の組織と戦うところとはともかくとして、ヒロインが月の姫君の輪廻転生した姿であることから始まって、その姫君と地球人男性との恋、及びそれは本来あつてはならないものであるという認識⁽⁹⁾、さらには、月世界の住人は皆長寿であるという設定⁽¹⁰⁾、注（7）で紹介した二作目の劇場用アニメの副題⁽¹¹⁾に至るまで、その類似は枚挙に暇がないほどである。

その他にも、これは何も竹取物語に限ったことではないので、その直接的影響とは言えないけれども、テレビアニメで言うと「S」編から仲間に加わる、セーラーウラヌス、セーラーネプチューン、セーラープルート、外部太陽系「三」戦士、及びその武器であるところの「三つのタリスマン」⁽¹²⁾、セーラースターズ編で登場する、セーラースターライツの三人が、正体を隠すために地球のアイドルグループに化けていた時に名乗っていた「スリー」ライツなど、この作品には、三という数字に対する異常とも言えるこだわりが見られることも、やはり竹取物語とも通じる特徴なのである⁽¹³⁾。

大体、セーラームーンの決め科白である、「月に代わっておしおきよ」にしてからが、かな

り東洋的な思想の強いものと思われる。と言うのは、英語の *lunatic* という単語が象徴しているように、月は形を変えるため、西洋社会ではほぼ、不吉・邪悪のシンボルとなっており⁽¹⁴⁾、これを正義の表徴と捉え得るのは、月には仙人が住むとする神仙思想や、真如（悟り）の印とする仏教といった、東洋的思想しか考えられないからである⁽¹⁵⁾。

源氏物語絵合巻に、「物語の出で来はじめの親なる竹取」（小学館・日本古典文学全集第二巻 P.370）とある如く、竹取物語とは、日本人の心に深く根を下ろし、様々な変奏の作品を生みだしてきたものであるから、それとこれほど類似した点を有するというだけでも、この作品がヒットした理由というのは充分窺われようが、「セーラームーン」の、文学的に興味深い点というのは他にもまだまだ指摘し得る。

そこで次節以降で、それらの内の幾つかを列挙してみようと思うのである。

2 変身について

「セーラームーン」の、文学的に興味深い点の第一は、変身時の科白である。

そうと言っても、セーラームーンは次々とパワーアップしていくから、それに付れて変身時の科白も変化する⁽¹⁶⁾が、順に挙げていけば、「ムーン・プリズムパワー・メイク・アップ」、「ムーン・クリスタルパワー・メイク・アップ」、「ムーン・コズミックパワー・メイク・アップ」、「クライシス・メイク・アップ」（スーパーセーラームーンに二段変身時）、「ムーン・クライシス・メイク・アップ」、「シルバー・ムーン・クリスタルパワー・メイク・アップ」である。並べて書けばお分かりのように、どんなに科白が変化しても、一つだけ変わらない部分が存在する。言うまでもなく「メイク・アップ」である。

つまり、セーラームーンの変身とは畢竟「化粧」なのであり⁽¹⁷⁾、そう捉えれば、変身後もほとんど姿が変わっていない意味が良く分かるが、この、変身が「化粧」だという発想は、同じくテレビ朝日（当時はNETテレビ）系列で1973年に放映された、「キューティーハニー」というアニメ（奇しくもそのリメイク版が「セーラームーン」の後番組として放映された）にも認められないことはない。これは、「キューティーハニー」が元々、片岡千恵蔵主演の映画「多羅尾伴内」シリーズを意識して作られた⁽¹⁸⁾からで、「多羅尾伴内」のそれが所詮メイクであったために、キューティーハニーの変身もまたそれを受け継ぐのだが、その時の科白は「ハニーフラッシュ」であるから、「セーラームーン」とは異なり、作者が明確にそれを意識していたかどうかは断定できない。すなわち、「セーラームーン」とは、恐らく初めて自覚的に変身を「化粧」として捉えた作品ということになるのだが、この「化粧」というのは、文学的にも深い意味を有するものなのである。

これは本来民俗学的な問題であるから、詳細はその方面の書籍を参照していただきたいが、端的には未開人のボディ・ペインティングや歌舞伎の隈取りに現れている如く、「化粧」とは元来人間世界以外の存在と同化するためのものであり、転じて、人間が異界へと進入していくための装置として文学的には用いられる⁽¹⁹⁾。そう考えれば、普通的女子学生⁽²⁰⁾である月野うさぎ達が、「メイク・アップ」により正義のヒロインに変身し、異界の者達と戦うという図式⁽²¹⁾は、実に良くできたものと評せよう。そして、この現実世界と異界との微妙な交錯というのも、言うまでもなく、かぐや姫の竹中生誕と昇天等の場面を有する竹取物語と通ずる要素なのである。否むしろ、注（19）の論考から知られるように、民俗学的には異界というのは、海山の向こう、橋の向こう等とも捉え得るから、日本文学とは延々とそれを描き続けてきたも

のとも言えるだろう。だとすれば、疑いもなく「セーラームーン」は、その延長上に位置することになるわけである。

3 少女の成長

「セーラームーン」の、文学的に興味深い点の二つ目としては、少女の成長というのが挙げられる。しかし、これだけだと少女マンガ全てに当てはまるものということになりかねないが、この作品の場合、特徴的なのは、それが実体を取り、極めて分かりやすい形となっていることである。と言うのは、テレビアニメで言うと第2、3シリーズだが、原作では第2シリーズのブラック・ムーン編⁽²²⁾に於いて、未来のセーラームーンと衛の子供である、うさぎ・スモールレディ・セレニティ（通称ちびうさ）が、30世紀から助けを求めにやって来るという形で登場するからである。そうは言っても、セーラームーンが子供を産むから成長という単純な話では決していない。言わんとしているのは、そこに親子の葛藤が見られるということなのである。

親子の葛藤というと、フロイトのエディプス・コンプレックス（この場合母娘なのでエレクトラ・コンプレックス）という語がすぐに浮かぶが、この作品はそれが非常に明瞭な形で現れている。と言うのは、これはいわば怪我の功名で、テレビアニメでセーラームーンを演じていた三石琴乃（ことの）という声優が、病気のために第1シリーズ終わりの方（第44話から）を降板せざるを得なくなるというアクシデントが起こった。彼女は結局、第2シリーズ第5話から復活することになるのだが、その間の穴埋めをしたのが荒木香恵（かえ）という声優で、彼女は多分その功績を認められ、後にちびうさを演じることになったからである。つまりこれは、同一人が親子の両方を演じているようなもので、正しくエレクトラ・コンプレックス的演出と、わくわくして見たものだが、これが考えすぎでないことは、原作にも次のような箇所があることより証明できる。

例えば、初めのうち変身できないちびうさは、母親であるセーラームーンにコンプレックスを抱いており、そこを敵の支配者ワイズマンにつけ込まれ、ブラック・レディという、敵方の戦士に変えられる。母に対する憎悪を肥大化されたブラック・レディは、母の最大の弱点であるタキシード仮面（すなわち自分の父親）を奪い、母を攻撃するのだが、その時の科白は次のようなものである。

「あたしは ほしいものが 手にはいったから この星なんか どうなっても いいの」

（中略）

「あたしのものよ」「ずうっと ひとりじめ したかったの」「あたしだけの ものよ」

（⑥PP.151～2）

或いは、ワイズマンを遂に倒し、すぐ帰ってくることにはなるのだが、一旦30世紀に戻らねばならなくなったちびうさの科白として次のようなものもある。

「……まもちゃんは あたしの 王子さま だったの」 （⑦P.101）

これらを見て、エレクトラ・コンプレックスという言葉の思い浮かべない文学者は先ずいないと思うが、一方、母親であるセーラームーン側にも次のような科白が見受けられる。

「年なんて カンケー ないよ！ どんなに ちっちゃくたって⁽²³⁾ オンナ なんだよ？」 （⑤P.61）

ちびうさが己の正体を明かさず、何故かブラック・ムーンに狙われる女の子としかイメージが無い頃、タキシード仮面がちびうさを余り庇うので、ヤキモチを焼いた場面であるが、その

正体が判明した後でも次のような科白がある。

「—— けっきょく まもちゃんは マーズや マーキュリーや ジュピターや …… 未来のことより —— あたしの ことより ちびうさを いちばんに えらぶのね!？」

(⑤PP.129～130)

そうは言っても、さすがに彼女も内心反省するのではあるが、そのときの心中でさえ次のように描かれる。

—— こんな だいじなときに ちびうさに やきもちなんて…… なに ばかなこと やってるの？ ちびうさは あたしたちの 子どもだったんだよ まもちゃんが たいせつにするのは とうぜんなの …… だけど… どうして ふたりで いっしょに 守ろうって いってくれないの？

(⑤P.131)

つまり、父を巡って、母と娘が相争うというエレクトラ・コンプレックスが、両方の側から描かれているわけで、大変分かりやすい形となっていると評したのは、この謂である⁽²⁴⁾。この、自己の成長というのは、実はこの作品全編を貫くテーマでもあり、そのことはセーラームーンの敵達の名称にも示されている。

ブラック・ムーンという名で既にそれを感じられた方もあろうが、原作に登場する⁽²⁵⁾ 敵方の名前を列挙すれば、ダーク・キングダム、ブラック・ムーン、デス・バスターズ、デッド・ムーン、セーラーギャラクシアとなり⁽²⁶⁾、2番目と4番目のものは、セーラームーン属するシルバー（ムーン）世界の反措定と、直ちに知られるのである。特に、4番目のデッド・ムーンの女王ネヘレニアは、月の闇の部分の住人という設定になっており、これが単なる符合なのではなく、計算された結果であることを窺わせるに足る。残りの3つに関しても、最後のセーラーギャラクシアは、論述の都合で後に回すが、やはりそれとして数えられるし、3番目のデス・バスターズは、女幹部のカオリナイトが率いるウィッチーズ5（ファイブ）のうち、4人までの必殺技が、セーラームーンの四守護神と同じ（これは、ブラック・ムーンのあやかしの四姉妹も同様）であることより、同じくセーラームーンの影と捉えられる。一番わかりにくいのは最初のダークキング・ダムであるが、これとてクィン・ベリル率いる四天王が存在するから、構造的にはこれらと全く変わらないということになる。すなわち、セーラームーンの戦いというのは、最初から最後まで一貫して自分自身との戦いなのであり、これが人間の成長を意味することは、今さら言うまでもない⁽²⁷⁾ と思うが、それは最後のセーラースターズ編に至ってさらに明瞭となるので、続いてそれを見てみよう。

このセーラースターズ編は、その前のデッド・ムーン編で、全てのセーラー戦士達がパワーアップし、スーパー化して戦うことに名前が由来するが、そのキーワードは「誰だって胸の星を持つ」である⁽²⁸⁾。この言葉及びこうした設定自体が、この話が人間の成長がテーマであることを雄弁に語っていると思われるし、後に復活することにはなるけれども、この話の冒頭で、セーラームーンの心の拠り所である地場衛がいきなり消されてしまうことも、やはり同様なものとして捉えられよう。だとすれば、名称及び外見が如何に異なろうと、同じセーラー戦士であるという一点に於いて、セーラーギャラクシアがセーラームーンの闇の部分を表すことは明らかなのである⁽²⁹⁾。現に、この話でセーラームーンは、自己の究極形態であるセーラーコスモスへと進化するのだが、その時出会ったちびちび（実は未来から自分を導くために子供の姿でやってきたセーラーコスモス。因みにテレビアニメではこれも三石琴乃が演じている）は、8人のセーラー戦士を敵に操られ、最大の危機に陥ったセーラームーンを救うため30世紀から

駆けつけたセーラーちびムーン（ちびうさが変身した姿）を制して次のように話す。

「—— ダメ 手を 出しちゃ いけない」「これは セーラー ムーンの 戦いだから
(18P.74)

そして、敵であるセーラーギャラクシアが、「セーラームーン おまえは すべてを 包み込む 戦士なのか？」(18P.131)と認めた時、この戦いは終わる。これが人格の完成を意味することは、もはや贅言を尽くすまでもないであろう。

このように、この作品は少女の成長を、比較的分かりやすい形で、しかも的確に計算して描いている。この、人間の成長というのは、文学の大きなテーマの一つであるから、それを明らかにし得たところで、最早それ以上言う必要はないのかもしれないが、これもまた竹取物語と共通する要素ではある。と言うのは、5人の求婚者の最後の一人である石上中納言が、自分が出した難題のために命を落としたと聞いた時のかぐや姫の心情「少しあはれ」(P.57。引用は新潮日本古典集成による)と、昇天する時に帝に残した歌、「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける」(PP.81~2)を併せ考えれば、誰でもそれは容易に導けることだからである⁽³⁰⁾。

このように辿ってくれば、この作品が如何に多く、竹取物語と共通する点を有するかは大体納得していただけたのではないと思う。それ故この作品を、現代の竹取物語と評しても構わないと思い、本稿の副題が誕生したわけであるが、既に少し触れたように、これは単に、この作品も竹取物語も、人を惹きつける魅力として同じものを持っていたということで、偶然の一致が多かる。しかし、このことにより確実に言えるのは、人間を惹きつける要素というのは、古代から余り変わらずに延々と引き継がれていることで、最近のテレビゲーム（特にロールプレイング型）等を見ていると、少なくともこういうものを制作する人たちは、それを良く知っているのではないかということなのである⁽³¹⁾。そこで最後に、これは竹取物語とは直接関わらないけれども、この作品にはもう一つそうした要素が見られるので、次節ではそれを取り上げよう。

4 アニメ主題歌について

前節終わりでも少し述べたように、これは原作者ともほとんど関わらない⁽³²⁾ので、本来同列に論ずべきではないのかもしれないが、この作品が多くの人に愛された理由の一つとして数えることは可能であると思うので、テレビアニメの主題歌についても一瞥してみよう。

最後の、セーラースターズ編に至って遂に変わったが、その前の4年間、このアニメの主題歌は「ムーンライト伝説」であった。堀江美都子や、今はむしろ俳優として有名になってしまったささきいさおといった、いわゆるアニメ歌手が活躍していた昔はともかく、1985年のおニャン子クラブうしろゆびさされ組を嚆矢として、アニメの主題歌をアイドル歌手が歌う時代になると、同じ曲を流し続けるとレコード売上げが伸び悩むという理由で、同じアニメでも必ず途中で主題歌を変えるようになった昨今の情勢⁽³³⁾を勘案すれば、この長さは極めて異例と言える。しかもこの歌の場合は、歌っている歌手自体は変化している⁽³⁴⁾のだからなおさらだ。言い換えればそれは、如何にこの主題歌が人々に愛されたかを語るものだと思われるが、その魅力进行分析するには、先ずその歌詞を掲げるしかあるまい。

ゴメンね 素直じゃなくて
 夢の中なら云える
 思考回路はショート寸前
 今すぐ 会いたいよ
 泣きたくなるよな moonlight
 電話も出来ない midnight
 だって純情 どうしよう
 ハートは万華鏡
 月の光に 導かれ
 何度も 巡り会う
 ※ { 星座の瞬き数え 占う恋の行方
 同じ地球（くに）に生まれたの ミラクル・ロマンス

も一度 ふたりで weekend
 神さま かなえて happy - end
 現在・過去・未来も
 あなたに首ったけ
 出会った時の 懐かしい
 まなざし 忘れない
 幾千万の星から あなたを見つけられる
 偶然もチャンスに換える 生き方が好きよ

※宮崎大学学術情報リポジトリ登録時に歌詞の一部を省略した

それぞれ対応する下線を施したのでお分かりのように、この詞は脚韻を踏んでいる。有名なのは漢詩のそれだが、漢詩に限らず、世界的に見れば、詩とは本来韻を踏むものなのだけれど、日本語ではそれが行にくいので、演歌など、一部の特殊な例を除いて、日本の詩は通常韻を踏んでいない。けれどもそれを敢えて行っているところにこの詞の第一の特徴があり、それにより当然調子は良くなるわけだが、この詞の形式美はそれにとどまるものではない。メロディがそうになっているので、歌ってみれば誰しも自然と気づくことだが、この詞はほぼ起承転結の形になっている。毎週テレビで流れていた一番が最も形が整っているのので、それを例に説明してみれば、1句目から4句目までが起、5句目から8句目までが承、9, 10句目が転で、11, 12句目が結という具合である。脚韻、起承転結と来ればお分かりのように、結局この詞は全体として漢詩の構造にかなり似ているということになるのである。

漢詩と似た構造が日本人の心を惹きつける魅力となり得るのかどうかと言われれば、難しい問題ではあるのだが、日本には古来詩吟のようなものもあるし、先ほども少し触れたように、

演歌などにも一部そのような形式が見受けられるから、その可能性は大なのである。

つまり、この主題歌が毎週テレビから流れていたことも、「セーラームーン」があれほどヒットした一因と考えられ、もしそうならこの作品は、原作とそのアレンジが見事に調和した稀有な例となるので、レベルが違う話題であることを承知の上で敢えて言及した次第である。

5 まとめ

以上、「セーラームーン」の文学的魅力と考えられることについて粗々述べてきたが、この作品にはもう一つ、近年流行しているジェンダー論的要素も見られる。例えば、セーラウラヌスは、「男でもあり 女でもある」「どちらの性も どちらの強さも あわせもつ 戦士」(ともに⑨P.20)とされる(但し肉体的には女性)し、最後の、セーラースターズ編に登場するセーラースターライツも、地球のアイドルグループに化けるためとはいえ、男装していたこともこれに通じるものと思われる。また、アニメの方では必ずしもそうなっているわけではないが、原作ではセーラームーンの方がタキシード仮面より常に強く、彼はいつも守られる存在であること⁽³⁵⁾等もその一つとして数えられようが、そもそも女の子が女の子だけで戦うという設定自体がそうであるとも言えるのである。しかしこれは、女性を惹きつけることは出来るかもしれないが、男性まで含めた広い範囲での魅力となり得るかどうかはまだ検討の余地があるので、今回は深入りしないことにしたい。

尤も、この作品の受け手はほとんどが子供であるから、本稿で考えてきたようなことが、理屈として分かったとは到底思えない。しかし、最初にも少し述べたように、本稿で明かしたかったことは、無意識のうちに人を惹きつける魅力であるから、分かったかどうかなどは初めから問題ではないのである。そして、そのような魅力に溢れたものが文学作品であると思うので、この作品も充分文学的だと判断するわけであるが、それは何もこれに限定されることなく、他のマンガの中にもこのようなものは数多く存在する。したがって、機会があればそれについての続稿も書いてみたいと思うものであるが、その最初に当たって言いたいのは、マンガだからと言って食わず嫌いをするのではなく、先ず読んで考えて欲しいということなのである。

注

- (1) 『夏目房之介の漫画学』『手塚治虫はどこにいる』(ちくま文庫)等。なお、氏は、1996年の7月から9月にかけて放映された、NHK人間大学「マンガはなぜ面白いのか その表現と文法」で講師を務められ、現在も不定期に放映される「BSマンガ夜話」で解説をされている。
- (2) 三谷邦明『物語文学の方法Ⅰ』(有精堂 1989)第二部 物語文学の系譜——初期物語 第八章 継母子物語の系譜——受容と文学あるいは古『住吉』から『貝合』まで——等。
- (3) この作品は、1993年度講談社漫画賞を受賞し、その時点でのコミックスの発行累計は500万部、10巻時点で1000万部であった。全18巻であるから、そのままの売れ行きが続いたとすると、最終的には2000万部ほどに達した計算になる。他に、次節で詳しく述べるように、アニメ化、ミュージカル化もなされている。
- (4) ただし、『なかよし』は月刊誌であるため、号としては92年2月号から97年3月号まで。
- (5) 「コードネームはセーラーV」の主人公・セーラーVこと愛野美奈子は、セーラームーンを守る四守護神の一人セーラーヴィーナス(もともとVはこの略)として「セーラームーン」に取り

込まれた。但し、「コードネームはセーラーV」自体も、「セーラームーン」番外編として、97年11月号まで、『るんるん』に不定期で連載された。

- (6) 但し宮崎では例によって一年近く遅れて開始された(終了はほぼ同じ。これは、宮崎では夕方放映されるので、野球等の特別番組によってつぶれることが無いため。省略されたわけではない)。なお、テレビアニメのタイトルは、「美少女戦士セーラームーン」(1992年3月～93年2月)、「同R」(93年3月～94年3月)、「同S(スーパー)」(94年3月～95年2月)、「同SS(スーパーズ)」(95年3月～96年3月)、「同セーラースターズ」(96年3月～97年2月)と、ほぼ1年間隔で変化した。原作はずっと「美少女戦士セーラームーン」のままであるので、本稿ではそちらを採用する(時に「セーラームーン」と略称する)。
- (7) 題名は順に、「美少女戦士セーラームーンR」(1993年)、「同S——かぐや姫の恋人」(1994年)、「同SS」並びに「亜美ちゃんの初恋」(1995年同時上映)と、4作目を除いてテレビアニメとほとんど変わらないが、内容は全くのオリジナルである(因みに、4作目は、インサイドストーリーとして原作には存在するけれども、テレビアニメ化はされなかった)。
- (8) 彼女は実は、猫型を本体とする宇宙人(つまり人型にも変身可能)、マウ星人であったと、セーラースターズ編で設定されているが、その構想がこの時点からあったかどうかは定かでない。但し、最初から人間の言葉は話し、セーラームーンとは違い、生まれ変わったのではなくコールドスリープで眠らされていたことになっているので、月の記憶は保有している。
- (9) 「地球と月の住人は通じてはならないの」「……それは神のおきて」「……好みに なっちゃだめよ」(②P.150。以下、原作の科白の引用は、講談社KCなかよし『美少女戦士セーラームーン』①～⑩による。「」は原則として吹き出し(但し、意味上明らかに連続していると判断できるものはこの限りではない)、空白は改行(マンガの改行は、詩とは違い、同種の文字(漢字とかひらがなとか)が連続する度に行われるから、／は用いなかった)とする)。但し、この二人は最後には結ばれている。
- (10) 「シルバー・ミレニアムの一族の寿命はおよそ約千年 だいたい成人後 老化速度がとまる」「——セレニティ(注・30世紀の世界でのセーラームーンのこと)は二十で女王として即位し 第一王女を生み そこからずっと その姿を とどめている」(⑤P.116)。
- (11) アニメというのは、テレビアニメですら、通常は原作者は関与しない(このことも、題名は原作に従った理由の一つ)もので、この作品の場合もほぼ例外ではないが、この劇場用アニメ2作目と、注(7)で述べたような事情で、「亜美ちゃんの初恋」だけは、原作者の手になるもので、同列に扱えると判断した。なお、この副題の「かぐや姫」とはルナのことで、セーラームーンではないが、映画原作の中には、ルナが竹取物語を読んで勉強するシーンが出てくる(⑩P.30)。
- (12) スペース・ソード(剣)、ディープ・アクア・ミラー(鏡)、ガーネット・オーブ(玉)の三つ。これが揃うと、セーラー戦士達のエネルギーを集めることが可能な「伝説の聖杯」が出現し、セーラームーンはこれを用いて、より強力な形態であるスーパーセーラームーンに二段変身する。なお、中には気づいた学生もいたが、これが三種の神器の変相であることは明らかで、いずれにせよ「セーラームーン」には、古代的要素が満ちていると言える。
- (13) 新潮日本古典集成『竹取物語』九頁頭注三等を参照のこと。
- (14) 『世界シンボル事典』(大修館書店 1997)等を参照のこと。
- (15) 尤も、日本には『月光仮面』という先蹤もあるから、その影響の線も考えられるが、それとて同様の理屈は成り立つから、論旨に差し支えないはずである。
- (16) これは大体1983年頃からの傾向で、この頃からアニメ制作に玩具メーカーが積極的に関わってきたためである。すなわち、変身時のアイテムを玩具として売り出し、それを売り続けるために、時々変身アイテムを変えるのである。
- (17) 因みに、他の9人のセーラー戦士も、「～メイク・アップ」で変身する。さらに、これはアニ

- メのみの趣向であるが、変身時、先述の外部太陽系三戦士は口紅、四守護神（セーラーマーズ、セーラーマーズ、セーラーマーズ、セーラーマーズの、セーラーマーズの近衛兵であるところの4人）はマニキュアが、空中から付着する。
- (18) 愛蔵版「キューティーハニー」（中央公論社 1992）冒頭、原作者永井豪自身の言葉による。
- (19) これについても多くの論考が存在するが、例えば、神野藤昭夫「異装する薫 ——『源氏物語』橋姫巻の一節 ——」（『日本文学』 日本文学協会 1988年10月号）等を参照していただきたい。
- (20) 先述の如く、連載開始時には中学2年生（『なかよし』の読者層に近く、受験も無く、それでいて学校にも不慣れではない年齢だからと思われる）であったが、その後進級し、最終的には高校1年まで至るので、こう呼称する。
- (21) セーラーマーズの敵達は、中には地球の人間もいるが、基本的には宇宙等、異界から来た者である。詳しくは後述。
- (22) テレビアニメ第2シリーズ「セーラーマーズR」第13話までは、放映が原作に追いついてしまったために、テレビスタッフにより作られたオリジナルストーリーで、原作には該当する箇所は全く無い。
- (23) 実際はちびうさは900歳（最終的には902歳になったところまで確認できる）なのだが、戦士となれないので、子供のまま成長が止まっているという設定。外見上の年齢を判定するのは、マンガの場合困難を伴うが、うさぎの家に居候することになったちびうさは、やがて1年生として小学校に通うことになり、それで誰も怪しまないから、その程度に見えるということで良いだろう。
- (24) そういう意味では、原作者によるちびうさの着想と、荒木香恵の活躍の先後も、大変興味深い問題ではあるのだが、今のところ確定できない。注（22）で述べたような事情が存するので、時期的にはほぼ同一になるけれども、なお考究したい。
- (25) 注（22）に述べたような事情が存するので、「セーラーマーズR」の第13話までの敵、エイルとアンは数えない。
- (26) 厳密にはこの他に、「かぐや姫の恋人」で登場する、プリンセス・スノー・カグヤと、『るるるん』に不定期連載した番外編に登場するバンパイア、地霊（ゲニウスロキ）達などが加わるが、いずれもインサイドストーリーなので数えなかった。
- (27) とりわけ四天王型がそれを意味することは、島内景二「柏木物語の成立」（『源氏物語の話型学』ベリかん社 1989）を御参照いただきたい。
- (28) 原作者である武内直子が作詞した「セーラースターズ」のオープニング・テーマで繰り返される言葉。少し用語は違うが、同趣旨のことは、原作のセーラースターズ編が始まるコミックス第16巻の見開き部分にも書かれている。
- (29) セーラースターズ編のもう一つのキーワードは、これもテレビアニメの宣伝及びコミックスの帯などで繰り返される、「セーラー戦士対セーラー戦士!!」である。
- (30) 詳しくは、野口元大による、新潮日本古典集成『竹取物語』の解説PP.138～146を参照のこと。
- (31) 最後に、「以上の会話はフィクションである」とされている（P.139）ので、何処までが真実か判断するのが難しいが、矢野健太郎（有名な数学者とは当然別人）の『ドリーマー』というマンガ（学研ノーラコミックス 1995年4月刊）には、制作裏話として、作者と雑誌編集者との会話が掲げられ、その中に「日常の闖入者」（「異星人とか女神とか妖精とかアンドロイドとかがやってくる」）パターンの「内」も矢野健太郎自身による）という言葉が見受けられる（P.45）。
- (32) アニメの主題歌は、まれに原作者が作詞する場合もある（この作品の二つ目のオープニングもそれ）が、ほとんどは別人が作詞する（因みにこの「ムーンライト伝説」の場合は小田佳奈子の作詞）。但し、これも場合によりけりだが、原作者がその作品のイメージを説明することもあるらしいから、この歌も全く関わらなかったかどうかは判然としない。
- (33) おニャン子クラブが歌っていた頃が一番短く、アイドル歌手が新曲を発表する（と言うか、それが新曲だったのであるが）のとはほぼ同じ周期の3か月くらいであった。その後、オープニング・

テーマの交換はもう少し長くなった（平均していないが、大体1年ぐらい）が、エンディングについては今もそのくらいであり、「セーラームーン」の場合もエンディングについては例外ではない。

- (34) 余り正確とは言えないが、記憶している限りでも、DALI、さくらっ子クラブさくら組、ムーンリップスの3バージョンが存在する。
- (35) アニメのタキシード仮面は、毎週最低一回、セーラームーンを危機から救っているが、これは脚本家が大抵男性（たまに女性の回もあるが、本質的違いは見られない。基本路線が定着しているからか）だからであろう。但し、タキシード仮面は救いはするが、とどめはいつもセーラームーンに任せるので、かろうじて原型をとどめているとも言える。

（1998年4月27日受理）